

主体的に運動に取り組む生徒を育てる体育授業の創造

岐阜県岐阜市立岐阜中央中学校 林 貴樹

1. 研究仮説

集団の発達のみちすじ（「所属」→「同調」→「協力」→「連帯」）に即して、集団の成立条件を整えることによって学習集団の発達を促すことができる。また、運動の特性や学習課題に合わせて、仲間の活動を援助する活動（相互援助活動）や言語活動を指導過程の中に位置付けて指導することにより、仲間に積極的に関わる態度が身に付き、運動の楽しさやできた喜びを味わいながら、仲間と共に主体的に運動に取り組む生徒を育てることができる。

2. 研究内容及び研究方法

仲間と相互に援助し合い主体的な活動ができる学習集団の育成
(1) 集団の発達のみちすじに即した段階的な指導
(2) 主体的な学びを生み出す相互援助活動

3. 研究実践

実践例 3年男子「バスケットボール」(11月実施)

(1) 集団の発達のみちすじに即した段階的な指導

集団が発達していく過程を大まかにとらえると、

図1のようになることが明らかになっている。

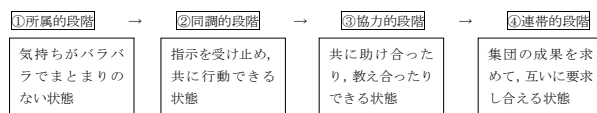


図1 集団の発達のみちすじ

また、図2の4つは観点と集団の成立条件である。

- ①課題：学習課題が明確になっていて、全員がそれに立ち向かっていること。
- ②役割：集団の中に必要な役割が位置付いていて、その機能が発揮されていること。
- ③きまり：集団の中できまりが作られており、誰もがきまりを守って活動していること。
- ④仲間：同じ集団の仲間として心情的な結びつきがあり、集団への所属意識があること。

図2 集団の成立条件

第2学年においては、そろって活動することができる同調的段階から、共に助け合ったり教え合ったりできる協力的段階へ発展させることを願って学習を行った。その際、集団の成立条件である4つの機能の中でも、特に「きまり」に力を入れて取り組んだ。それは、学習課題の達成に向けて、「こういう仲間になりたい」という願いがもてたときに、そのために必要なきまりを自分たちで考えさせることで、より主体的に活動することができると思ったか

らである。具体的に実践したことは、それまで教師が与えていた『集合・挨拶・練習・反省会』等の「きまり」をグループで考え、遂行させたことである。その結果として、きまりを守ろうとする意識が高まり、リーダーの指示に一貫性が生まれ、技術面での具体的なアドバイスをするPOの姿や、態度面で場に応じた声かけをするMOの姿が見られたりした。しかし、仲間同士による励ましの声かけやアドバイスが多くなった一方で、「グループ課題を達成するために〇〇さんをうまくするんだ」「相手チームの攻撃を阻止するには、〇〇さんのディフェンスへの参加が必要だ」というような、グループとしての成果を求める気持ちや、仲間への要求は少ないように感じた。

そこで、今年度は、「仲間（心情面の結び付き）」に重点をおいて指導し、心情的な結び付きが強くなり、どの子も所属意識がもてるグループをつくっていきたいと考えた。主な実践として、ひとつのグループを取り上げ、チームメイトに厳しく指摘するリーダーの姿を全体の場で紹介した。厳しくする理由を質問し、仲間の成長とチームの勝利を心から願っている気持ちを出させることで、相手を思いやる気持ちが強いからこそ、厳しく要求できることに気付かせた。このように「仲間」に重点を置くことで、グループの成果を求めて互いに要求し合える連帯的段階を目指した。



役割を確かめるリーダー会



板書による課題提示

(2) 主体的な学びを生み出す相互援助活動

学習指導要領解説には、球技における態度の目標の例として「仲間の学習を援助しようとする」と書かれている。これは、練習の際に、サイドから仲間の動きを指示したり、チームの作戦や戦術などの学習課題の解決に向けて仲間に助言したりすることなどを示している。これをお互いに行うことで、自己の能力を高めたり、仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動したりすることにつながると考える。

第2学年では「速攻」を学習するため、準備運動にセットシュートとランニングシュートを位置づけ、グループで練習をさせた。これらを「シュートダービー」と名付け、ポイント化して、毎時間の記録を残した。これにより、グループ間で競い合いが生まれ、仲間同士で教え合う姿も増えた。

第3学年では、遅攻を使って相手のゾーンディフェンスを攻める方法を学習するため、ポジションに応じたパス練習およびシュート練習（ポストプレーにつながるターンシュートやカットインシュート）を取り入れ、技能を身に付けさせた。また、ポジションごとの課題を共有し、グループ内でアドバイスを送り合うことで、言語活動の充実を図った。さらに、単元の後半にはリーグ戦を位置付け、ゲームの勝敗にこだわらせることで、自主的な活動を生み出した。このように、相互援助活動を通して、互いの運動技能

が高まったり、仲間との連帯感が高まったりするものにした。



ゲーム前の作戦会議

指導計画（全15時間）

時間	学習内容・学習活動
1	単元全体の見通しをもつことができる。 (オリエンテーション)
2,3	ゾーンディフェンスからパスカット速攻で攻めるゲームができる。 (復習ゲーム)
4,5	ゾーンディフェンスからリバウンド速攻で攻めるゲームができる。 (抽出練習①とゲーム)
6~9	速攻で攻められないときに、遅攻を使って攻めるゲームができる。 (抽出練習②とゲーム)
10	グループの特長を生かした攻撃法を練習することができる。 (総合練習)
11~14	リーグ戦での勝利を目指し、作戦を遂行することができる。 (リーグ戦)
15	課題の達成ぶりを振り返ることができる。 (反省会)

4. 成果と課題

○成果

- ・集団発達のみちすじを基に、仲間へ重点を置いて指導したことで、グループ内における個々の心情面の結びつきを強めることができた。要求する子、それに応える子、周りの仲間など、それぞれの気持ちを知ることで、相手の立場を考える機会が得られ、他者を思いやる心が養われた。
- ・ゲーム記録を基に、毎時間、グループ課題の見直しをさせたことで、役割やポジションに応じた個人課題を共有して練習に臨むことができた。仲間の課題を理解したことで、教え合いや要求が生まれ、個人の上達をグループみんなで認め、喜び合える集団が育った。これら、相互援助活動を通して、成果を求めた集団の高まりが、運動技能の向上に結びつくことを確信することができた。

●課題

- ・グループ課題の達成や、作戦の遂行のためには、個々の言語理解力が不可欠である。そこで、今後、役割に応じたリーダー会を充実させ、言語活用能力の向上を図っていく。